

---

the uncanny valley of artificial intelligence

Awakevening

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The uncanny valley of artificial intelligence

### 【Nコード】

N7611Y

### 【作者名】

Awakevening

### 【あらすじ】

みんな誰もが経験したこと

Sweet sixteen girl

湿り気のある土を、疎らに割れた瓦が夥しく覆っている。しかし、宵からの雪により、今はその多くが隠れてしまっていて見えない。その中で、一筋の堀建て柱だけが、その土地のかつての姿を踏襲するように、白く立ち尽くしている。

ここはどうも家屋であつたらしいが、小綺麗に整つたこの一角が、さながら夢の島のようなそれを許すとは思えない。

ここを通りすぎるだけの僕に真相は知る由もないが、とにかく奇妙な光景に間違いなかつた。

立ち止まる僕を、期せず見慣れない制服が追い越した。

女だった。白い蒸気を上げながら、何やら携帯電話で話し込んでいる。

カーデイガンを着ているため、どの学校の生徒かは分からなかつたが、背丈や骨の秀でた顔立ちからして、おそらく高校生だろう。

融雪された路肩のみぞれを、鈍く光るローファーで踏みしめながら歩いている。

もちろん、それを疑う余地はなかつた。

夕暮れ時に、駅前はこの道を通る女子高生など、あの瓦礫の山とは違い当たり前の光景であり、いわば注目に値しないものに他ならぬはずだ。

誰も気にとめるものはいない。気にしていないふりをしていなければならぬのだ。

## The edge of glory

しかし、一種の怖いもの見たさというか、そういう感情が働いたのだと思う。のっぴきならない何かを白日のもとへ晒すためにも、僕は視線をそらすわけにはいかなかった。

女は携帯電話を切り、ふいに瓦礫の方面へ走り出した。今にも音を立てそうなくらい、蒸気を盛んに上げている。栗色のショートヘアが揺れ、赤熱した耳が見えた。

ここで僕は気づいたが、この現象はどうやら今日だけのことではないらしい。

得体の知れない熱気みたいなものにあてられた気がして、思わず目をやると、五人ほどの「連中」がすでにこちらへ視線を向けていた。どれもこれも炯々としたような具合で、少なくとも一介の通行人へ向ける視線とは到底思えない。

つまりこの誰もが、あるひとつのぼんやりとした事実を見抜き、疑っているのだ。

女はとうとう、瓦礫のさなかへと足を踏み入っていた。

他より少し低まった立地のそこは、むろん侵入のあとがあるはずもなく、今はまっさらの白い平地のようである。

膝上ほどのチエックスカートをなびかせ、その体はひとつひとつ軽快に、地面へ靴底の陰影を作り出していた。

## Y o u s p i n n e r o u n d

誰もが目を疑った。

いや、実際にそうだったかは、女へ意識の大半を向けている僕には分からない。

でも、そうしないわけにはいかないはずだ。いよいよ尻尾を掴んだというか、そういう感覚があったと思う。

僕たちの抱く疑惑、僕たちの向ける視線は、それこそ死体に向けるような本能に起因する嫌悪や拒絶、好奇に他ならない。

そしていまこの好奇心が、おそらくは最高の山場を迎えるときなのだ。「あいつは何をやっているんだ？」と。

そんな中、女は瓦礫の中ほどで歩みを止め、しゃがみ込んだ。雪の中へ手を突っ込み、何かを探っているようだ。

雪をかき分けるたびに、白い指が赤みを帯びていく。さすがに冷たいらしく、ひどく整った顔立ちの端々を歪ませている。

そして何かを探り当てたようで、今度は周りの雪を隅へ押しやり始めた。

おそらく、瓦礫の中のある面を雪から掘り起こしたいのだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7611y/>

---

The uncanny valley of artificial intelligence

2011年11月24日22時47分発行